



02

経営革新 [20]
コマツ 野路國夫 氏

テーマ企画 プロフェッショナル

06

グローバル時代における「5つの課題」
克服には「判断力」を養うことがカギ
東芝 西田厚聰 氏

10

年齢・性別・国籍を問わず、変革や越境経験を
通じて世界に通用するプロ人材を育成する
日本 GE 木下達夫 氏

14

アメリカのHRの新しい流れと
日本企業が直面する課題
中央大学大学院 中島 豊 氏

18

真の人事プロフェッショナルとは
ビジネスリーダーである
SHRM ハワード A. ワラック 氏

連載

01

今月の数字

23

メディアの目 [20] 福田能久 氏

24

手本なき時代の経営戦略 [8] 住田 潮 氏

26

ノブレス・オブリージュ [16] 宮本惇夫 氏

28

JMAレポート 新プログラム・レポート

30

JMA recommend

32

談論風発 [8]

「灯火親しむべし」とのことわざにあるように、読書に適した季節がやってきた。毎年10月27日から11月9日の2週間は読書週間。今年の標語は「本と旅する 本を旅する」である。本の楽しみ方は多彩だ。書店で本を買ったり、図書館で借りたりして読むほか、タブレット型端末やスマートフォンで電子書籍を読んだり、読書のスタイルも多様になっている。

電子書籍元年といわれた2010年から3年が経ち、電車内でも端末で読書をする人を見かけるようになってきた。毎日新聞社の『読書世論調査』※1によると、電子書籍を「読んだ」人は14%。10代が最も多く、年齢が上がるにつれ減っており、電子書籍は若者と相性が良いようだ。調査会社のMM総研の調べ※2では、2012年度の電子書籍端末の出荷台数は47万台。前年度比42%増で、2013年度は52万台と今後も拡大を見込んでいる。

その一方で、全国の公共図書館数も増えている。日本図書館協会のデータ※3によると、ここ10年間を見ても数字は右肩上がり、2002年は2,711館だったのが、2012年には3,234館となった。個人登録者数も4,145万人（2002年）から5,413万人（2012年）に伸びている。地方自治体の財政悪化で、公共施設消滅のニュースも聞かれるなか、これらの数字は意外に感じるが、一般の生活者には、ベストセラーや子ども向け絵本、新聞・雑誌が読み放題の図書館は、おおいに重宝されているといえよう。

公共図書館の大半を占める公立図書館を巡っては、佐賀県武雄市が市立図書館の運営を民間企業に委託したことが話題となった。現在も賛否の議論が続いているが、公立図書館のあり方を考えるきっかけの1つになったことは確かだ。

誰もが手軽に楽しめる公共図書館の存在は、「知のインフラ」として、地域に不可欠なものであるのは言うまでもなく、そのあり方も時代によって変化していくのかもしれない。ただ、図書館がどのような形になっても、こうしたデータを見るかぎり、「活字離れ」が言われているわが国で、「知」を求める人たちは、まだまだ健在といえそうだ。

増えつづける「地域の知を支えるワンダーランド」

全国にある公共図書館の数は

3,234
館

